

## 書評

## 安田章生著『藤原定家研究』

八 亀 師 勝

本書は、序文にもあるように、安田章生博士の学位論文（昭和39年、大阪大学）を中心に、著者の三十年に亘る定家研究を大成した書である。六一七頁という大冊を公にされた著者に対して、まずお祝いを申し上げますとともに、心より敬意を表したい。

全体が四編から成っているが、目次の大略を記すと、次のごとくである。

才一編 定家とその時代 才一章 定家の人間像 (一)経歴 (二)経済状態 (三)健康状態 (四)性格・心境 (五)生涯の区画／才二章 定家の時代意識 (一)「紅旗征戎非吾事」という意識をめぐって (二)「不運之身遇乱代」という意識をめぐって 才二編 定家の歌および歌論 才一章 資料について (一)歌の資料について (二)歌論の資料について／才二章 初学期の歌と歌論／才三章 新風樹立期の歌と歌論 I 歌 (一)達磨歌の根本的特質 (二)歌風の幅広さ (三)艶・妖艶美の歌 II 歌論 (一)定家歌論の出発点と基調 (二)四十歳前後の歌論意識／

才四章 I 歌論 (一)正統性への回帰 (二)「有心体」論 (三)選歌・歌合の判詞に見える歌論意識 II 歌／才五章 晩年期の歌と歌論 I 歌 II 歌論 (一)妖艶美の尊重と『新勅撰集』の歌風との関係 (二)定家歌論の変らざる基調とその志向

才三編 定家とその周辺の主要歌人 才一章 西行と定家 (一)西行の生涯と定家の生涯 (二)西行の歌と定家の歌 (三)定家の西行評／才二章 俊成と定家 (一)俊成の生涯と定家の生涯 (二)俊成の歌論と定家の歌論 (三)俊成の歌と定家の歌／才三章 式子内親王と定家 (一)内親王と定家との交渉 (二)内親王の歌と定家の歌 (三)定家の式子内親王評／才四章 後鳥羽院と定家 (一)院の生涯と定家の生涯との交流 (二)院の定家推賞 (三)院の定家批判 (四)院の歌と定家の歌／才五章 家隆と定家 (一)家隆の生涯と定家の生涯 (二)定家・家隆並称・比較論 (三)家隆の歌と定家の歌 (四)家隆の歌論と定家 (五)定家の家隆評

才四編 日本の芸術と定家 才一章 定家と当時の歌壇

(一)当時の歌壇の定家評 (二)心と詞との関係から見た定家と当時の歌壇 (三)美意識の上から見た定家と当時の歌壇／才二章  
 和歌史と定家 (一)和歌史における「中世」の意味 (二)中世和歌と定家 (三)近世和歌と定家 (四)近代短歌と定家／才三章  
 歌論史と定家 (一)「心と詞」の問題をめぐって (二)艶・妖艶の美意識をめぐって (三)方法論の問題をめぐって／才四章  
 連歌史・俳諧史と定家 (一)定家の連歌 (二)定家の歌論と連歌論史 (三)定家の和歌と連歌史 (四)芭蕉と定家／才五章  
 近代詩と定家／才六章 能楽と定家 (一)能楽論と定家 (二)謡曲の引き歌となつてゐる定家の作品／才七章 茶道と定家 (一)茶道の精神と定家 (二)名物としての定家の筆跡  
 付録一 定家作品評釈 付録二 新古今時代和歌年表  
 安田博士は、右のような構想のもとに、従来の基礎的研究や著者自身がすでに発表された多くの著書・論文に基づいて、大きな視野のもとに、歌人定家の人間像、その文学の特質及び歌論の性格、日本芸術においてその占める位置、などを明らかにしておられる。

まず才一編においては、定家の生きた時代が平安から鎌倉への激しい転換期であつたということから、「こういう時代には、時代意識ないし時代感覚がことにするどく深くなるはずである。また、定家において、そのことは、とくにいちじるしかつたといえるようである」という認識のもとに、「紅旗征戎非吾事」と「不運之身遇乱代」という二つの意識を分

析される。すなわち、能動的・積極的に時代を否定していた「紅旗征戎非吾事」という時代意識が、頼朝の死後その強さを失い、受動的・消極的にのみ働いたと思われる過程を的確に指摘され、頼朝の死前後の定家の時代意識とその文学活動との密接な関係を浮き彫りにされ、詩人定家を描いて間然するところがない。詩人定家を真に理解するものは、昭和の動乱期を生きた詩人であるというべきであらうか。

才二編から才四編までは、定家の歌及び歌論の時代的変遷について述べ、当時の代表的歌人や歌壇の中で定家を位置づけるとともに、さらに進んで、日本芸術における定家の位置を考察するという、きわめて雄大な構想のもとに論が展開されてゆく。

まず、歌及び歌論の画面から、時代によつて変化の認められることを指摘し、次に、「一人の作家の特質というものは、他の作家のそれと比較対照することによつて明らかにされる場合が多い」とする立場から、当時の代表的歌人との関係を通じて、西行にみられるがごとく、実情主義的な歌風が正統的なものであり、定家のごとき、非現実的・知的・構成的なそれは、詩歌史上異端的なものであつたことを明らかにされる。さらに、晩年には定家が正統的な歌風に移つていつたことを、豊富な実例の引用や当時の歌壇との関係の中で指摘しつつ、定家の変らざる基調として、次の三点をあげておられる。

## 書評『藤原定家研究』

- (一) 終始、優艶の美意識が流れていたこと。  
 (二) 「姿・詞の趣」を大切にしていたこと。  
 (三) 現実の体験を超越し、詩の世界を造型する態度を捨てなかつたこと。

そして、右の三点に要約される定家の歌風は、必然的に象徴主義を志向していることを指摘され、それに立脚して、

定家ほど詞が美を生み出すという詩の秘密をよく知り、実作の上にもそのことを果している歌人は、当代、他にはなかつたといえるのである。

という結論が導き出されてくるのである。この間、豊富で巧みな引用に従い、穩当で明確な結論に導いておられるといえよう。次に、中世の歌壇との関係に及び、

こういう発想法を確立して、すぐれた作品を詠んだところに、定家の和歌史上の重大な位置もあり、そのことが中世和歌に及ぼした影響を測定するところに、中世和歌史に占める定家の位置についての最大の問題点もある。

とされ、

西行的発想法と定家的発想法と——それを古代和歌的発想法と新古今的発想法といいかえてもよく、また、その根本的な特色の一面を強調して、「見様体」と「幽玄体」といつてもいい——は、中世和歌史における二大潮流となつたものである。しかもこの二つの流れは共に存在しているとはいえず、前者からはおおよそ平板で退屈な作品

しか生み出されず、後者からは中世独自ともいふべき見事な作品があらわれたのであつた。そのことを思えば、定家が中世和歌史ひいては和歌史全般に占める位置の大きさは、おのずから明らかであろう。

と、その和歌史的な位置づけを明らかにされる。さらに、そのような立場から、近代に至るまでの和歌史における定家の位置について述べ、連歌・俳諧はもとより、近代詩・能楽・茶道といつたように、非常に幅広く考察を進められ、日本の芸術の中で占めた定家の位置の大きさを改めてわれわれに教えておられるのである。

さて、本書を通読して感ずる一、二を述べてみると、その一は、目次を見ても分明であるように、観点の広さということである。当時の歌人や歌壇を通して、更には後代の芸術に及ぼした影響を考察して（もつとも、筆者の不才をも顧みず、ないものねだりをする非礼を許していただけるならば、後代の文学者たちの定家評の考察の上に、たとえば、心敬の「山ふかし心に落つる秋の水」や立原道造の詩における定家の影響の考察にみられるがごとき、作品の内部に入った高見や、連歌の定家に与えたと思われる影響についての論及をも加えていただけたら、と思わないでもない）、定家を浮き彫りにしておられる。その意味において、定家の文学的評価とともに、その芸術史上の地位をも明らかにしようとした著者の目的は見事に成功しているといえよう。後進に示唆するところ

も多く、画期的な功績であるといわねばならない。

いま一つは、安田博士の問題意識の明確性ということである。序文で自らも触れておられるように、著者が国文学研究に歩を進められたのは動乱の昭和十年代であつて、そのとき著者の眼にとまつたのが、同じように平安から鎌倉への動乱期を生きぬいた定家であつたのである。従つて、定家の文学やその背後の時代にむけられるきびしい考察は、単なる研究のための研究の域にとどまらず、もつと深い作者の内面からの激しい要求がしからしめたものなのである。しかも、著者は実作者でもあり、自らの作歌の上にも教示を得てきたと言つておられる。そこにも著者ときわめて密着した問題としての定家の存在が認められ、その意味で、著者と定家との関係は、あたかも茂吉における人磨を彷彿せしむるもののあることを感ずる。本書が、定家の作品の文学的評価を決定することと、定家を芸術史的に把握することという、この二つの、ともすれば背離しやすい危険性を見事に克服しているのは、なによりもこの著者の問題意識の明確さが大きな要因になつてゐると筆者には思われるのである。

最後に、長年の研究に、このようなすくれた書物でもつて、一つの区切りをつけられた著者が、研究・教育・実作の上で、さらに精力的な活動を続けられるように祈つて擲筆する。(菊判六一八頁 定価三、〇〇〇円 東京都新宿区弘方町二七 至文堂刊)

		(頁)	(行)	『藤原定家研究』正誤	(誤)
同	同	六一	四	重出歌	重出題
		六五	六	『名所百首歌之……』	『名所百首歌衣……』
		一二三	一二	『自筆本近代秀歌』	『自筆之本……』
		一六六	八	(七字削除)	先にも引用した
		一八二	一	打ち続き人の死ぬる	打ち続き死ぬる
		一八三	八	出でて	出でて
		一八四	七	……思ひは	……思ひを
		一八六	七	……はらはらと……	……はらはらね……
		二〇七	一五	建久四年	同四年
		二二一	一八	御隨身	御隨身
		三三三	二	四集	五集
		三五四	六	著者未詳	著者未詳
		三五七	四	……みれば、	……みれが、
		三八四	六	似て	以て
		三九六	七	……いえる……	……いる……
		四〇二	一〇	方法論	発想法
		四五五	一七	……あるやうに……	……あるやうに……
		四七二	九	シテ節、今日は……	シテ節、今日は……
		四九六	七	……あはれは……	……あはれ……
		五〇五	一二	……あはれは……	……あはれ……
		五三八	一八	……からいうと、	……からというと、
		五六一	三	憶ふ	憶う
同	同	六	三	思ひ	思い
同	同	七	七	愁ひ	愁い